

## 姉崎神社殺人事件

Rev.1 2023年6月10日  
土井湖南

2029年の4月、私・土井湖南は67歳を迎えた。退職後は古代史を学び、史跡巡りを趣味にしている。一昨年の夏ごろ、私の友人・栗栖庸介が、その類まれなる記憶力と洞察力を生かして警視庁の難事件の解決に協力してきた。その縁で「上総国分寺殺人事件」の解決に向け千葉県警に協力し、昨年の春ごろには「丸亀城殺人事件」の解決のために香川県警に協力したが、私はその場に居合わせた。庸介は東京の大学教授で私よりひと回り歳下だが、高校の同窓会で知り合い、お互いに古代史が趣味と分かり友人となった。「丸亀城殺人事件」のときには大阪の大学と共同研究のために客員教授として大阪に赴任中だった。それで彼は週末に丸亀に来ることができたので、県警に「丸亀城殺人事件」の協力ができたのだ。今もまだ彼は大阪に赴任中である。

彼が大阪赴任中に一緒に飛鳥地方の史跡を訪ねたいと話しているが、お互いに都合の合う時期が調整できないため、まだ実現していない。

実は、「上総国分寺殺人事件」のときには二人で上総国分寺台遺跡群の見学を予定していた。大学教授の彼は多忙なので、先に私が事前調査に訪れたのだが、そのときにたまたま殺人事件に遭遇した。彼に連絡を取り、彼が週末に上総国分寺に出向いて県警に協力して難事件を解決したことがあった。その縁で私も事件に関与することになった。「丸亀城殺人事件」では、私が高校同期会の出席する時期に合わせて、二人で坂出市の讃岐国府跡を訪れることにした。そしてその時期に開催される丸亀城桜まつりを私が見物したことで殺人事件に遭遇した。私が彼に連絡した結果、彼は週末に丸亀に来て、香川県警に協力することになったのだ。

今年のはじめ、ふとしたことで千葉縣市原市姉ヶ崎の「忠僕市兵衛」のことを知った。横浜在住の私はそれまでまったく知らなかった。

市兵衛は江戸時代に儒学者の「荻生徂徠」や儒家で昌平坂学問所を管理運営した「林大学頭」によって紹介され、俳人・宝井其角の句にも読まれ、江戸中の話題となった姉崎(千葉縣市原市)の人物と知る。また、昭和になって水上元三による直木賞小説の題材となった人物で、姉崎で一番有名な人物だそう。姉崎の妙経寺(みょうきょうじ)に市兵衛の墓があることが分かり、歴史好きの私は是非訪れたいと思った。

その騒動についての資料によると

【元禄時代の1695年、五代将軍綱吉が「生類憐みの令」を發布するなか、姉崎で幕府の許可を得て害獣狩りの最中、深城地区の山中で鹿と間違えて「お竹」

という婦人を撃ち殺すという事件が起こった。犬一匹殺してもお咎めがあるこの時期、まして人を殺してはどの様なおとがめがあるか、関係する姉崎、片又木、立野、不入斗、深城、天羽田、長谷川の七ヶ村の名主は相談のうえ、この件を内密に収めることにした。ところが、これが幕府の耳に入り七名の名主は遠島となり、次郎兵衛は伊豆の大島に、土地家屋は没収となってしまった。これが「お竹騒動」と言われる事件だ。姉崎村の総名主・斎藤次郎兵衛の下僕・市兵衛は日頃の恩を返すのはこの時とばかり、島流しになった主人の家族を、娘を奉公に出した金で買った小屋に住まわせ、懸命に働いて養う一方、自ら江戸へ通い幕府に「自分を身代わりにして主人の釈放を」訴え続けた。ときには主人の子・万次郎を背負い、哀願すること十一年の1706年、はじめ門前払いしていた幕府も市兵衛の忠義に打たれ、次郎兵衛らを釈放することになった。

一介の下僕が幕府を動かしたのだ。このことは江戸中の評判となり、講談や歌舞伎の演題となり、儒学者・荻生徂徠（おぎゅうそらい）は同時期の元禄の大事事件「赤穂浪士打ち入り」を引き合いに「武士は主人のために尽くすのは当たり前、市兵衛の忠義は赤穂浪士以上だ」と世にも稀な美談であると讃えた。また『上総義民 市兵衛記』の撰文を將軍家に献上してその偉業を讃えた。俳人・宝井其角（たからいきかく）は「起きて聞けこのほととぎす 市兵衛記」との句を詠んだ。忠義の人として戦前の小学校の修身の教本となり、大正時代には映画化され、昭和十六年作家・村上元三は「上総風土記」と題して市兵衛の奮闘を書き、直木賞を受賞した。同書を原作にした映画『明けゆく空』（1935）もある。】とある。

このことを知り、さらに興味が湧いた。

妙経寺の場所をネットで調べてみた。JR内房線の姉ヶ崎駅の近くと分かった。



東京の職場で部下だった石丸春子さんが同郷の男性と結婚した後も、故郷の姉ヶ崎に在住していることを思い出した。彼女は結婚後もしばらく勤めていたが、子供を授かり退職した。その結婚式に主賓として招待され、祝辞を述べたことが縁で、また人柄もよく優秀だった彼女とは退職後もずっと年賀状を交わし

ていて、彼女が歴女で、地元の歴史や史跡を楽しんでいることも知っていた。ご子息が成人し、社会に巣立った後、姉崎大好き人間の彼女は「姉ヶ崎を愛する会」に入会し、地元の史跡ガイドも務めていて、いつかガイドをしているところの写真が掲載された‘市報いちはら’を送ってきたことがある。少しふっくらとした身体に着物がよく似合っていた。着物は彼女の勝負服なのだろう。

そのようなことで彼女に連絡を取り妙経寺の案内をお願いした。申し出を快く引き受けてくれたばかりか、「せっかく来るなら、姉崎の他の史跡も案内したいと申し出があり、折角なのでご厚意をお受けすることにして、一泊二日の予定で訪れることにした。事前に姉崎高校の生徒らが作った「姉崎 歴史の旅マップ」を送ってくれた。



ネットで調べると

【ふるさといちはらを愛してやまない「姉崎高校ふるさとを愛する会」は、2022 年秋開館予定の「I'Museum(市原歴史博物館)」のフィールドミュージアム構想と連携、早々、2022 年版「姉崎歴史の旅マップ(A3 三つ折)」を今年 1 月発行し地域を盛り上げています！】とあり、このとき初版を出したそうだが、その後改訂版を出し続けているようだ。

横浜の我が家から、横浜駅に出て横須賀線・総武線の直通電車を使えば、そこから姉ヶ崎まで2時間ほどで到着できる。

2029年5月14日(月)13時に姉ヶ崎駅で待ち合わせることにした。12時前に姉ヶ崎駅に到着し、まずは紹介してもらった‘あねがさきロイヤルホテル’に向かう。徒歩で10分ほどのところだ。荷物を預けて、ホテル内にあるレストランで昼食をとり、再び駅に向かう。すると驚くことに彼女は着物姿で待っていた。着物が良く似合う。年齢は忘れたが、おそらく50代半ばだろう。さらに驚いたことに彼女が所属する「姉ヶ崎を愛する会」の白石代表も一緒だった。おそらく私と同年配だろう。私にできるだけ詳しく説明しようと気を遣ったのだろう。後で分かるが、白石代表は長年、地元をよく知り、広めるための活動をしているそうで、おそらく姉ヶ崎史に関しては第一人者なのだろう。その足跡を知れば知るほどその熱意と行動に頭が下がる。

まず今日は妙経寺を訪問し、次に姉ヶ崎神社を訪れ、翌日に市兵衛の子孫の斎藤家の屋敷を見て椎津城を訪れる予定と説明があった。

#### ○妙経寺

駅から徒歩で数分のところにある妙経寺向かう。



お参りを済ませ、市兵衛の墓参りをする。墓のわきには宝井其角(\*1)の句碑が建っている。



市兵衛の墓



「起きて聞けこのほととぎす 市兵衛記」の句碑

宝井其角の説明を受けたが、予備知識不足の所為で説明を未消化だったので、後で調べてみた。

#### \*1. 宝井其角

其角は江戸堀江町で生まれた。はじめ、母方の榎下姓を名乗っていたが、のち自ら宝井と改める。なお、姓を榎本とする表記が見られるが誤りとされる。

延宝初年(1673年)、松尾芭蕉に入門。1679年刊行の『坂東太郎』に発句3句が見え、1680年以後、『桃青門弟独吟廿歌仙』『田舎之句合』『次韻』『武蔵曲』に入集。1683年『虚栗(みなしぐり)』を刊行して、漢詩文調流行の一端を担った。1686年、宗匠となり、貞享4年(1687年)『続虚栗』を刊行。その後も『いつを昔』『花摘』『誰が家』『雑談集』を刊行し、俳諧選集『猿蓑』に序文を寄せる。1694年、芭蕉の死に逢い、追善集『枯尾花』を刊行したほか、点者として『句兄弟』『末若葉』を刊行。井原西鶴との交流があった。

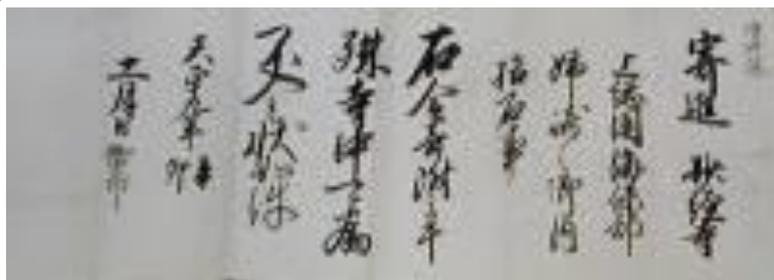
頂いた資料により説明を受けた。

願本法華宗の妙経寺は室町時代の1460年に日暁上人が開基し、かつては生い茂る緑に覆われた広い敷地に多くの御堂が立ち並んでいた。江戸時代には、この地にあった鶴牧藩の人々の崇拝を受け、要職であった多くの藩士が眠っている。ほかにも、徳川光圀や小林一茶などが旅の途中に立ち寄ったことで知られる。妙経寺周辺にはもともと古くから人々が多く住んでいた形跡があり、縄文時代の姉崎妙経寺貝塚や、古墳時代の姉崎一帯の「姉崎古墳群」に含まれる「姉崎妙経寺古墳群」など、多くの遺跡がある。

水戸藩主水戸光圀が祖母・清光尼(英勝寺の開基で、俗名を「於梶(おかじ)」、後に「於勝(おかつ)」)の三十三回忌供養のため水戸から鎌倉に出かけたときの日記「甲寅紀行」(こういんきこう)の中に、「1674年、鎌倉の英勝寺を参内するかたわらに妙経寺に立ち寄って宿泊した。」との記述があると。

後で調べると

【徳川光圀の紀行文「甲寅紀行」(こういんきこう)には、妙経寺宿泊の項に日蓮直筆で長さ二尺の『曼荼羅』がある。徳川家から所有地10石を安堵する御朱印が四通あると書かれている。】と分かった。



○姉崎神社

平成通を通過して、姉崎神社に向かう。地名は姉崎、駅名は姉ヶ崎であるが、社名は姉崎である。1986年の火災により、社殿が消失し、その後建立されたようだ。



創建は『古事記』・『日本書紀』によると、

第12代景行天皇(けいこうてんのう、在位71年～80年)が110年、日本武尊(やまとたけるのみこ)が東征の際、走水の海(浦賀水道)で暴風雨に遭ったが妃の弟橘姫(おとたちばなひめ)の犠牲によって上総に上陸することができたとする記事が見える。社伝ではその時のこととして、日本武尊が宮山台(現社地)で弟橘姫をしのび、風の神である支那斗弁命(しなとべのみこと)を祀ったのが創建とする。

また社伝では、日本武尊の死後に父である景行天皇が日本武尊の縁の地を歴訪し、姉崎神社に日本武尊を合祀したとする。さらに、第13代成務天皇(せいむてんのう、131～192年)、当地を支配していた上海上国造(かみうなかみのくにみやつこ)(\*2)の忍立化多比命(おしたてけたひのみこと)が天児屋根命(あめのこやねのみこと)と塞三柱神(さえのみはしらのかみ)を合祀したとするほか、第17代履中天皇(りちゅうてんのう、400～406年)のときには忍立化多比命(おしたてけたひのみこと)の孫の忍兼命(おしかねのみこと)が大雀命(おほさぎのみこと)を合祀したとある。

#### \*2. 上海上国造

上総国海上郡(かずさのくにうなかみぐん、現在の千葉県市原市の一部)を支配した国造。上菟上国造(かみうなかみのくにのみやつこ)とも。

『古事記』では天穂日命(あめのほひのみこと)の子の建比良鳥命(たけひらとりのみこと)を上海上国造の祖としている。『国造本紀』によると成務天皇の時代に天穂日命の八世孫の忍立化多比命(おしたてけたひのみこと)を国造に定めたとき、その孫・久都伎直(くずきのあたえ)が第15代応神天皇の時代に下海上国造になったという。

姉崎古墳群は上海上国造一族の墳墓であり、姉崎神社の神官は海上国造の末裔といわれている。

平安時代の中期に役人・新刊が守るべき法令集「延喜式」(えんぎしき)の中に当時の官が管理する全国の神社2861社が載る「神名帳」(じんみょうちょう)があり、それには姉崎神社も載っており(式内社という)、由緒ある神社であると。

神社には朱雀天皇(すざくてんのう)が将門降伏の祈祷の祈願に太刀を奉納、源頼朝が先勝祈願の馬揃えをしたなど多くのことが伝わっている。

また「松を嫌う」ことでも有名。旅に出た夫神がなかなか戻らず、女神が「待つのは辛い、いやじゃ」と嘆いたのを村の者が「女神様は松が嫌いなのだ」と聞きちがえ、それ以降、境内には一本の松もなくなり、正月には「門松」をたてず、榊に替えた「門榊」を

たて、松の絵など「松」と名がつくものは一切使わなくなったという。各戸で「門櫛」をたてる風習は見られなくなったが、姉崎神社では今でも「櫛飾り」を飾っている。

#### 門櫛(櫛飾り)



姉崎神社では頼朝が先勝祈願の馬揃えをしたのが起源といわれる「流鏝馬」(やぶさめ)が昭和の終わりころまで行われていた。地元では「まと」「まとう」と呼び、現在の神門から東に向かう道で行われており、地名の小字名「馬場」はその名残と。馬の調達が困難になり、廃止せざるを得なかったそうだ。



明治のまとう (姉崎町年中行事より)



昭和のまとう

【「故郷姉崎町年中行事」は、明治時代の姉崎の年間行事・くらし・伝承・風俗・風景を絵で伝える貴重な画帳の資料。姉崎郷土史の先覚者である斎藤孝氏が、私財を投じて、姉ヶ崎に住んでいた画家の広瀬盧竹(ひろせろちく)に描かせたもの。躍動感あふれる当時の人たちの描写は、観るものを引き込む。細部まで丁寧に描かれており、当時のくらしを調査する資料としても一級品といえて、全 58 枚あると。】

白石代表と石丸春子さんの歓待に感激し、事前に予約をしていないので失礼とは思いながら、ホテル内にあるレストランで夕食を一緒にと申し出たら、あっさりと受けていただいた。歴史談議が楽しみだ。

会食の中で、

・「あねがさきロイヤルホテル」は、元は小林一茶が宿泊した旅籠屋の丁子屋と知る。

後で、妙経寺ゆかりの人を調べると

【小林一茶

木更津の俳諧仲間を尋ねる途中に立ち寄る。

また丁子屋(現 あねがさきロイヤルホテル)に宿泊した記録が残る。】とあった。

・頼朝が再起した房総半島には多くの頼朝伝説がある。100 を超える。姉ヶ崎地区にも頼朝が逗留して旗竿を新たに切り替えたので「切替」(きりかえ)の名前を賜った立野の豪農・切替家、駆け付けた兵を観覧した深城の「御所覧塚」(ごしょらんつか)、椎津八坂神社に木製の獅子頭を奉納した等々があり、各地にある「白幡神社」(白幡は源氏の旗印)も頼朝にちなむ社。切替家には頼朝から賜った品々が残されていると聞いたことがある。

説明を受けて、

【ネットで調べた「頼朝の道」を読んだことがある。

鎌倉幕府の事跡を知る上で最も重要な資料と言われている『吾妻鏡』によると、

「確か頼朝が9月13日三百余騎の精兵を率いて安房国を発ち、9月17日に下総国府で千葉篤胤およびその子息と対面したとあるが、その途中については記述していない。司馬遼太郎は著書「三浦半島記」の中で、4日間で鴨川から市川に陸上で移動するのは時間的に無理なので、おそらく太平洋側の海路を北上したのだらうと書いている。私も吾妻鏡の日程は正しいだろうし、時間を考慮すれば船で移動したのだらうと思う。吾妻鏡にその間について記述を残したくなかった理由は、平氏の勢力圏の房総半島を陸上で移動するのはリスクがあるので頼朝自身は船で移動し、陸路は影武者が味方を募り、軍資金を調達しながら移動したのではなかろうか。おそらく影武者は複数いて、複数のルートを移動したので、数多くの頼朝伝説が残されているのだらう。

弘法大師伝説や義経伝説のように、御本人が訪れたことのない地域にも多くの伝説が残されているが、のちの世に偉人にあやかって作られた伝説であろう。同様に頼朝にあやかって作られた伝説も含まれているだらうが。」と思ったが、そのときは何も言わなかった。】

・姉崎古墳(の資料も頂いた)

資料によると

市原市内には 1000 基を超える古墳があるといわれている。「姉崎古墳群」は市内の大型古墳の半数を包括し、南関東最大級の規模で「ちば遺跡 100 選」にも選ばれている。

### AN-02 姉崎天神山古墳

全長130メートルで、市内最大、南関東でも十指に入る規模の大型前方後円墳です。発掘調査が行われていないため、詳細は明らかではありませんが、前方部が平坦かつ細長く、後円部に比べて低い点や、平地を見渡す台地先端に立地する点などから、古墳時代前期の4世紀前半に築造されたとみられます。墳丘のくびれ部には、菅原道真を祀った社が鎮座します。



### AN-05 二子塚古墳

標高5mほどの砂堆上に位置する大型前方後円墳で、全長は約110mあります。前方部と後円部の2か所で見つかった埋葬施設からは、鏡、玉類、武具、馬具などが出土し、墳丘の中段と下段には円筒埴輪が列状に置かれていたとされます。出土遺物の特徴から、5世紀前半の築造と考えられます。また、直弧文と呼ばれる呪術的な模様彫られた石枕は、国の重要文化財に指定されています。



姉崎神社周辺は大型前方後円墳が密集している地区であり、姉崎天神山(てんじんやま)古墳、釈迦山(しゃかやま)古墳、鶴窪(つるくぼ)古墳、二子塚(ふたごつか)古墳、堰頭(せきがしら)古墳、六孫王原(ろくそんのうばら)古墳(これは前方後円墳＝以上現存、姉崎山王山(さんのうやま)古墳、原1号、2号古墳＝以上消滅があり、このほか数多くの円墳・方墳もあった。これらは姉崎地区を拠点としていた「ウナカミ豪族」の墓(\*4)であり、大型前方後円墳は首長の墓であり、円墳・方墳はその陪臣の墓と考えられている。

\*4. 「ウナカミ豪族の墓」(後で調べた)

発掘された二子塚古墳からは「石枕(国重文)・銀製耳飾り・馬具」が、山王山古墳からは「竜頭太刀・武具(市指定)」が発掘されており「ウナカミ豪族」はかなりの勢力を持っていたと思われる。4世紀から7世紀まで300年にわたる一族の古墳が残ることは貴重なものであり、未発掘の大型古墳からも多くの発見があることでしょう。

さらに姉崎天神山古墳と姉崎二子塚古墳についてネットで調べる。

【姉崎天神山古墳は、通称・天神山と呼ばれます。姉崎丘陵上に点在する古墳群中最大規模の前方後円墳です。全長 130m、前方部幅 50m、後円部径 67m の規模です。築造年代は群中でも早い古墳時代前期と推定されています。発掘調査は行われていませんが前期古墳としては県内最大の規模を誇り、養老川下流域の勢力が重要な位置を占めていたことを示しています。墳丘上のくびれ部には菅原神社(200本の桜の名所)が建ちます。昭和 48 年(1973 年)3 月 2 日に千葉県の上跡に指定されました。

姉崎二子塚古墳は、東京湾の旧海岸線から 800m ほどの距離にある標高 5m 前後の砂丘上に立地し、主軸長 106m・前方部長 54m・後円部径 52m の前方後円墳で、姉崎古墳群を代表する大型古墳です。昭和 22 年(1947 年)の発掘調査により鏡・首飾・冑片・銀製耳飾など豊富な副葬品が出土し、円筒埴輪列が検出されました。これに先立つ昭和 20 年(1945 年)に偶然出土した直弧文付き石枕(國学院大学蔵)は国の重要文化財に指定されています。5 紀前半の築造と推定され、のちの上海上国造(かみつうなかみのくにのみやつこ)に連なる人物の墓と考えられます(姉崎神社管理)。】

#### ・市原市歴史博物館

7 年前の 2022 年秋に開設された。翌年の 5 月、「姉ヶ崎を愛する会」は広瀬蘆竹の「故郷姉崎町年中行事」の展示会を開催したが、今年(2029 年)5 月の連休期間中に第 3 回目の展示会を開催すると分かった。土日祝日には五井駅から無料バスが運行しているそうだ。

#### 市原の「王賜」銘鉄剣

—銘文の釈文—

(表)王賜□□敬[安]

(裏) 此廷[刀]□□□

—読みの一例—

王□□(剣の意味)を賜フ。敬ンデ[安]ゼヨ。

此ノ廷[刀]ハ□□□(吉祥句)



市原は約 35000 年前の石器時代から近現代まで悠久の歴史を積み重ねてきた文化の象徴として貴重な歴史遺産が数多く残されていて、それらを扱っている歴史博物館であり、展示室には、国産最古の有銘鉄剣として名高い稲荷台 1 号墳出土「王賜」銘鉄剣をはじめ、公開が望まれてきた「いちはらの至宝」が集結していると聞いたので期待が膨らむ。それに「故郷姉崎町年中行事」も見てみたいので、今度の連休に来ることに決めた。

都築区にある横浜歴史博物館は市営地下鉄センター駅から徒歩 5 分のところにあり訪れるのに利便性はよかったが、史跡資料が期待外れだったことを思い出した。

#### ・チバニアン

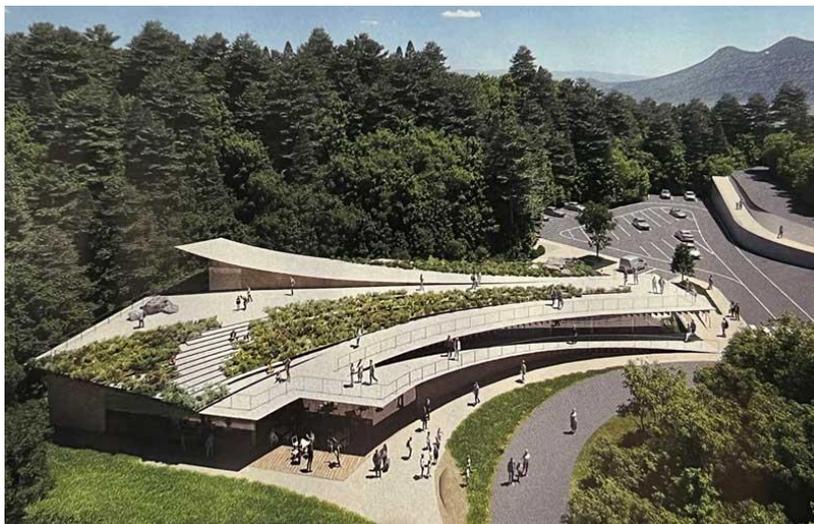


チバニアンは田淵にある地磁気逆転層だが、この頃は国民の間である程度浸透してきている。2026 年に新国立競技場等の設計で有名な隈研吾氏設計・監修の「チバニアンガイダンス施設」が田淵に完成し、土日祝日には五井駅からチバニアンまで無料バスを運行したことにより、市内外の来場者が増えたそうだ。

建設を発表した当時の千葉日報によると

【隈氏は、2020 年東京五輪・パラリンピックのメインスタジアムとなった国立競技場など数々の有名建築を手がけた実績がある。ガイダンス施設の設計方針は 2023 年に市民会館で開かれた市民シンポジウムで次のように説明した。

基本設計を手がける仮称「チバニアンガイドンス(案内)施設」の概要を発表した。施設は地質年代「チバニアン(千葉時代)」の命名由来となった同市田淵の地磁気逆転地層周辺に建設。風光明媚(めいび)な里山の自然に溶け込むような外観で、隈氏は工業の時代から自然の時代への転換点を象徴するような施設になる。】



#### ・新市民会館

国分寺台にあった市民会館が老朽化したので、五井駅に近い、更級公園の近くに移転する。新市庁舎は間もなく完成する。駅から徒歩で行ける距離なので利便性がよくなり、来場者も増えてイベントも増えるだろうとか、市原市の発展する姿が見て取れるような話も聞かせていただいた。

この他、白石代表のこれまでの活動や今後の計画を拝聴し感嘆したが、予備知識の少ない自分にはとても消化しきれなかった。

#### ○斎藤家

翌日、旧房総往還を10数分歩いて、市兵衛の子孫の斎藤家(\*3)の屋敷を見る。市内各所の斎藤孝さんの功績の話も拝聴した。

#### \*3. 斎藤家

市兵衛の末裔である。お竹騒動以来、空席となっていた姉崎村総名主に市兵衛が推挙せられ、苗字附帯を許されて初代斎藤市兵衛を名乗り、帯刀御免の家柄となった。

斎藤家は県道297号線(房総往環)沿いの姉崎仲町にある。十二代目・斎藤孝氏(1877年~1967年)は、姉崎の郷土史家の先駆者であり、私財を投じて神社仏閣、故事、古蹟を後世に残すことに尽力され、姉崎地域の各所にその功績を残した。

十三代目・斎藤孝三氏は父親の志を継ぎ、地域文化の発展に尽くし、冊子「忠僕市兵衛物語」を残した。

### ○椎津城

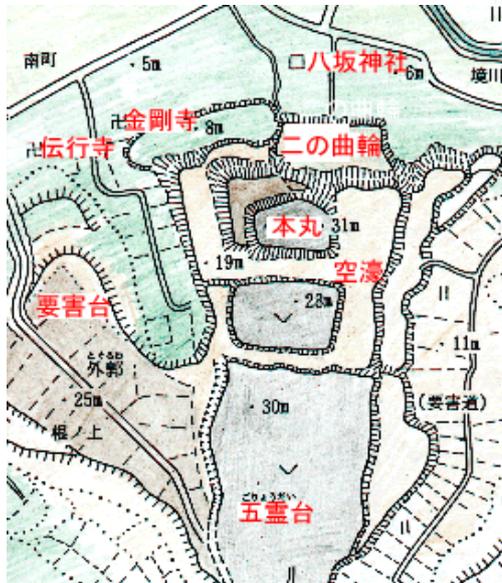
そして八坂神社でお参りして、そこから数分で椎津城にたどり着いた。

説明と資料によると

千葉県市原市の南の玄関口、姉崎の八坂神社の裏手の台地に広がる椎津城は、南北約 400 メートル、東西約 180 メートル、標高 28 メートルで同市内でも最大級規模の城郭である。



椎津城絵図(江戸時代・部分)



椎津城(しいづじょう)は、室町時代のはじめ、甲斐武田氏から分かれ上総武田氏を起こした武将・武田信長が築城した(諸説ある)。城といっても当時は、天守閣などなく高台に土塁(どるい)をめぐらし、小屋・物見台を置く「要害(ようがい)」といわれる通りで

ある。大きな戦いが8回もあった。城下には房総往還、久留里往還(鎌倉街道ともいう)が通り、眼前には港を抱え、陸路・海路の重要拠点であったからである。

多くの戦いの中でも1552年の戦いは熾烈だった。北条方の椎津城主武田信政を里北条方の椎津城主武田信政を里見義堯が攻めた戦いだ。信政軍は頑強に防いだが遂に支えきれず、信政は自刃し、城は炎上。双方で千四百人もの死傷者を出した。県指定文化財「椎津のからだみ」(\*4.)で供養する椎津小太郎はこの信政がモデルとされている。「からだみ」は『前城主を忍んだ空の葬儀』『城主を逃がすための偽装の葬式』などの話が伝わっており、椎津城に係わる行事だ。

#### \*4. 椎津の「からだみ」

椎津では毎年、旧盆の8月15日「からだみ」の行事を行っている。

「からだみ」は椎津城に関する行事で『前城主を忍んだ空の葬儀』『城主を逃がすための偽装の葬式』などの話が伝わっている。

『そらやっせ おっころしよ じゃらぼこ じゃらぼこ おんじゃんじゃん』

夕闇に浮ぶ「万燈」を曳き廻し、一斗缶を叩く独特のリズム、掛け声の間を走る鉦の音、賑やかな行列がゆったりと進む。

目的地まで来ると見物人は、万燈のバレン(写真の長く垂れ下がった飾り)をわれ先にとの奪い合い、家々の門口に差して悪魔除けにされる。



1552年の大戦の後も北条と里見との椎津城争奪の戦いは続き、城主は何回も変わった。豊臣秀吉の小田原攻めの際、北条方であった椎津城も秀吉勢に攻められ落城し、椎津城は歴史から消え去った。歴史からは消えた椎津城だが、江戸時代に出された曲亭馬琴「南総里見八犬伝」の冒頭で『「伏姫」の母は椎津城城主の娘・・・』として登場している。椎津城跡は2017年県指定史跡に指定された。現在、「史跡椎津城を守る会」が椎津城跡の整備作業を行っており「富士山に見える城跡」を目指している。また、姉崎高校「ふるさとを愛する会」が多くの案内標識を作成し、整備作業にも参加している。雑木・竹林が整備された。椎津城跡の場所は椎津・八坂神社の裏手になる。

ウィキペディアによると

【椎津城は千葉県市原市椎津にあった日本の城。千葉県指定史跡。

#### 概要[編集]

---

千葉県市原市の南の玄関口、姉崎の八坂神社の裏手の台地に広がる椎津城は、南北約400メートル、東西約180メートル、標高28メートルで同市内でも最大級規模の城郭である。

椎津は豊かな穀倉地帯を臨み、武蔵・下総から上総・安房の房総に通じる房総往還道や久留里街道西往還、椎津湊を抑える水陸交通の要所であったため、この城をめぐる攻防戦が幾度となく繰り広げられた。

築城に関しては諸説あるようですが、千葉氏の一族で椎津三郎と称した椎名胤仲が14世紀に居城したとされ、豊臣秀吉の小田原攻めで浅野長政に攻められ落城したようです。

椎津城の歴史は北条氏、里見氏の関東における覇権争いの歴史であった。

戦国時代、上杉謙信と武田信玄が川中島で決戦をしていたとき、関東では小田原北条氏と、安房里見氏がともに関東の覇者にならんとしてその勢力を拡大していった。そして両者は上総・下総で激突し、椎津城もその荒波に揉まれ、北条方・里見方との間を揺れ動いた。

この争いは国府台(こうのだい)の戦いで北条氏の勝利で決着がつき、椎津城は北条方のものとなった。しかしその北条氏も豊臣秀吉に攻め滅ぼされ、椎津城も秀吉より関東を与えられた徳川軍に攻め落とされその役目を終えた。

#### 参考文献

市原教育委員会「市原のあゆみ」

鈴木亨著「日本合戦史100話」中央公論社】とあった。

椎津城跡の帰り、鶴牧藩跡に立ち寄り、それからホテルに帰ることにした。

## ○鶴牧藩



AN-03 鶴牧藩庁跡

(姉崎小学校の門を入ってすぐ)



鶴牧藩校・修来館

(姉崎町年中行事より)

いただいた資料と説明によると



1827年、安房北条より水野忠韶(ただてる)が転封して「鶴牧藩」が立藩した。忠韶は市原郡椎津村城地(現姉ヶ崎小学校)に陣屋を建設する。水野氏は家康の生母・伝通院(お大の方)の生家という名門。鶴牧藩は忠実(ただみつ)、忠順(ただより)と三代続き、藩校「修来館」を開校して学問の振興に力を注ぎ、小藩ながら三十年の歳月と莫大な費用を投じ司馬遷の「史記」の解説書「鶴牧版史記評林」を編纂し、明治天皇の御前開講を行う栄誉を得た

### ○姉崎藩

陣屋の所在地は不明であるが、江戸前期には姉崎藩が存在した。藩主として徳川家康の次男・結城秀康の子である松平忠昌と松平直政が相次いで入封したが、いずれも短期間で廃藩となった。忠昌は福井藩に転出し、直政は松江藩の藩祖となった。



姉崎藩藩主は大大名へ

2029年5月3日、私は車で市原市歴史博物館、姉崎古墳群、もう一度古墳のある姉崎神社に向かう。横浜の我が家からアクアラインを經由して1時間半ほどで歴史博物館に到着。

### ○市原歴史博物館



ここは触れる展示品が特徴である。展示品に直接触れることができる。歴史体験館があり、そこは掘れば貝が出てくる場所もある。古代住居も再現している。

展示物についてとても説明できないので、来館して直接ご覧になっていただきたい。

「故郷姉崎町年中行事」の展示品は明治時代の風習や暮らしがよく分かる貴重な財産だと思う。

後で、展示会場の写真を送信してもらった。

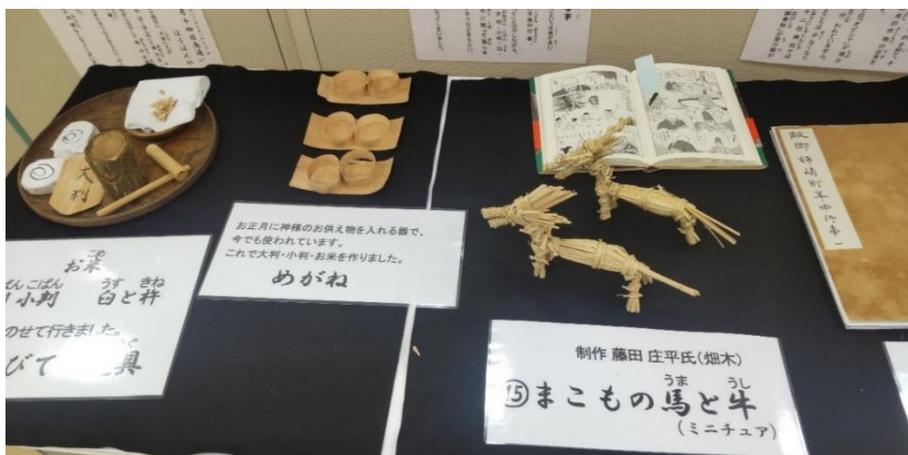
- ・展示会場



- ・年中行事の原本と保存箱



- ・七夕行事の「まこもの馬と牛」



‘まこも’の馬と牛を調べると

【千葉県では馬や牛を作る日は、ほとんど旧暦7月7日、あるいは新暦で月遅れの8月7日に限られています。行事として最も多い例は、7日の早朝に、子供がまこも等の草製の馬や牛を引いて野や水辺に行き、そこで草刈りをするものです。刈った草は馬牛に背負わせ、再び引いて家に戻ってきます。】

「まこも」はイネ科マコモ属の多年草



・姉崎神社祭礼の神輿渡御（みこしとぎょ、神霊の御幸(ぎょこう、みゆき)が行われる神社の祭礼）が描かれている「のぼり旗」



白石代表と石丸春子さんにあいさつをして、「あねがさきロイヤルホテル」に向かう。

翌日はチバニアンを見学する予定で1泊2日の予定で来たのだ。チバニアンは一時期、テレビや新聞で見聞きしたことがあったので名前だけは知っていたが、理解はしていなかった。チバニアンガイダンス施設を含め、自然との調和を

テーマにした隈研吾さん設計の建物もこの際見てみたいと思い、訪問を決めていたのだ。

「あねがさきロイヤルホテル」に向かう前に、紹介してもらった「うなぎ八幡屋」にて昼食をとる。ウナギに限らず寿司、海鮮料理、和牛料理もあり、種類がそろっている。海鮮丼を食したが、新鮮で美味だった。

ホテルに車を置いて、徒歩にて古墳巡りする。一日に 10,000 歩以上歩くことにしているからだ。

二子塚古墳と天神山古墳を見て、姉崎神社境内の古墳、それに鶴窪古墳を見ることにする。

### ○姉崎古墳群

平成通を歩いて二子塚古墳に向かう。いただいた資料の写真の通りの外観だ。横浜には 90 くらい古墳があり、15 くらいが残存しているそうだが、そのうち、立ち入ることができるのは、青葉区の稲荷前古墳群と港北区の綱島古墳、そして鶴見区の三ツ池古墳の 3 カ所だけだそうだが、今まで古墳を見たことが無かった。

しばらく眺めて、往時を思いめぐらせてから、天神山古墳に向かう。そこから姉崎神社に向かう。神社の境内の御社古墳、御社 2 号古墳、御社 3 号古墳を見て、釈迦山古墳を見て鶴窪古墳に向かう。まさに姉崎古墳群だ。

市原市にはたまにゴルフに出かけたことがあり、姉ヶ崎カントリークラブでもプレーしたことがあったが、姉ヶ崎のことはほとんどと言っていいほど知らなかった。忠僕市兵衛が縁で訪問することが縁で、白石代表と石丸春子さんのおかげである程度姉ヶ崎を知り得たことに感謝している。

### ○殺人事件に遭遇

夕方 5 時ごろ、姉崎神社から姉崎中学校、姉崎公民館を経てホテルに向かうとして、神社前から坂を下り始めたとき、とある 3 階建ての民家の玄関口で驚くべき光景を見た。玄関から少し入ったところで、60 歳前後の男性が倒れているのが見えた。よく見ると血痕が見られた。すぐに警察に連絡し、救急車の手配もお願いした。数分後には、救急車と、パトカーが来た。被害者は心肺停止状態で、後ほど病院で死亡が確認された。

ホテルに市原警察署の刑事がやってきた。第一発見者から、できるだけ情報を得ようとするだけでなく、容疑者の一人なのだろう。怪しい人物を見なかったかと問われたが、ほとんど人に会わなかったと説明した。姉ヶ崎に来た目的、事件前の行動も質問された。

翌日の新聞を見て驚いた。「姉崎神社殺人事件」との見出しだった。神聖な神社の境内で起こった事件ではないが、被害者が姉崎神社の近傍に住み、姉崎神社

の破魔矢とお守りを持っていたことでマスコミがこのように命名したのだ。勿論警察では事件を別の名前で呼んでいるだろう。被害者は63歳の市原幸三氏と判った。神社の巫女さんに確認して、破魔矢とお守りは事件発見の直前にいたことが判明した。おそらく千葉市に住む孫に与えるためにいただいたのであろうと推測された。帰宅したところで犯人と鉢合わせをして、被害にあったのだろう。勿論、怨恨その他の線も視野に入れているだろうが。

翌日、県警の刑事が訪ねてきた。上総国分寺殺人事件の担当刑事で、面識があった。一通りのヒアリングを受けたが、犯人を特定するためのヒントになるような話は出なかった。どうやら、遺留品も残されているようで、私が被疑者との見方は緩和されるだろうと思った。

県警の対応は迅速だった。被害者の交友関係、過去のトラブルの有無、アリバイを人海戦術で調べ始めた。それだけではなく、この地域のプラントの定期修理従事者の宿泊者名簿も収集した。この地域のプラントの定期修理の従事者は数万人規模で、全国の工場地帯の定修工事で全国を移動するのだ。工事従事者の確保のために各工業地帯で定修時期を調整しているそうだ。

第一発見者なので、犯人として被疑者から免れないかもしれないので、しばらくホテルに滞在することにしたが、不安になったので、石丸春子さんに連絡した。事件のことはすでに知っていたが、私が事件の第一発見者であり、私が被疑者の一人かもしれないと思い込んでいることを知り大変驚いたのだろう、すぐにホテルに駆けつけてくれた。ホテルのレストランでコーヒーを飲みながら、話をしたが、その中で「20年ほど前の2件の連続殺人事件（\*5）が迷宮入りしたままであり、当時初動捜査を問題視する話も出たようで、今回は県警の威信をかけて捜査しているのではないのでしょうか？」とのことであった。

\*5.姉崎連続殺人事件(後で調べてみた)

2018年1月の千葉日報の記事による

【市原市姉崎の不動産会社事務所で2008年1月、経営者の永野武さん＝当時(78)が何者かに刺殺された事件はこの17日で、発生から10年を迎えた。事件の2週間前には、近くの民家でアパート経営の刈米祐夫さん＝当時(90)＝の他殺体が見つかっているが、二つの未解決事件の関連性や犯人像は依然として謎のままである。捜査が長期化する中、両事件の風化が懸念される。

千葉県警によると、刈米さんは同月3日、同市姉崎の自宅で、顔から血を流して死亡した状態で見つかった。金庫が動かされるなど室内に物色された形跡があったため、県警は強盗殺人事件と断定。市原署に捜査本部を設置し、不審者の洗い出しを始めた。

捜査本部は犯人が金銭目的で侵入し、刈米さんを繰り返し殴ったとみて調べる中、2週間後の17日には、数百メートル離れた不動産会社事務所で、永野さんが刺殺される事件が発生。こちらは物色の形跡がなく、明確な殺意を持った人物による犯行の可能性が高まった。

近接した地域で連続して起きた凶悪事件に住民は不安の日々を過ごしたが、その後の捜査は難航した。いずれも高齢者を狙った犯行でありながら、殺害方法や目的など態様が異なっており、両事件の関連の有無は現在も不明という。

同署にはこの1年で5件の情報提供が寄せられたものの、犯人につながる有力な手掛かりは得られていない。「断片的な情報でも、思い出したことがあれば連絡をいただきたい」と同署。両事件の風化が懸念される中、真相解明に向け、新たな情報が求められている。

#### ◆解決へ「情報提供を」 遺族ら駅前で呼び掛け

二つの未解決事件の手掛かりを得ようと、永野武さんの遺族らが17日、現場近くのJR姉ヶ崎駅前でチラシ配りを行い、道行く人に「10年前の事件について情報提供をお願いします」と呼び掛けた。

活動は朝の通勤・通学の時間帯に合わせ、県警の捜査員らを含む約40人態勢で実施。「10年前の犯人の情報をお寄せ下さい」などと記されたチラシ約3千枚を駅利用客らに手渡し、早期解決への協力を求めた。

永野さんの長女、曾根裕子さん(62)は10年という歳月に「今も悔しさは消えない」と心情を吐露。孫の志穂美さん(28)は「新しい情報が出れば」と述べ、貴佑さん(26)は遺品のジャンパーを着て「優しかったおじいちゃんがなぜ殺されたのか。犯人を捕まえたい」と声を振り絞った。】

「チバニアン」見学は次の機会とし、横浜に帰った。

事件から3か月ほどして犯人逮捕が発表された。新聞情報によると、室内を物色した痕跡もあり、空き巣狙いに入った犯人のものと思われる靴跡、それに犯人と思われる人物のマスクと眼鏡が残されていたようだ。

新聞情報に推測を加えると、事件から2か月を経ても、犯人と思しき人物が洗い出せなかった。被害者の関係者はすべてアリバイがあることが分かった。ほとんどの定修従事者はその時間帯は工場に

いて、アリバイがあることが分かった。公民館、神社他の防犯ビデオを綿密に調べた結果、神社方面から団地方面に向かう黒ずくめの不審な人物が見つかったが、その後の足取りが掴めなかった。どこかに車を置いていて、そこで着替えて立ち去ったのだろう。近くに 4000 戸規模の大団地があるので、黒ずくめの怪しい人物の目撃者捜しのヒアリングを行ったが、怪しい人物の目撃者はあられなかった。諦めかけたときに、警察がヒアリングした人物の中の一人、団地の住人・鷲尾敏之が「2 カ月くらい前に被害者が重い荷物を運んでいたの、運ぶのを手伝ったことがある。荷物を中に持ち込むのに、土足で良いと言われたので、靴を履いたまま 2 階と 3 階まで荷物を運んだ。そのときに顔を柱にぶつけて怪我をした。血の付いたマスクは被害者が処分してくれることになっていた。顔をぶつけたときに眼鏡を落としたが、そのまま忘れてしまっていた。」と話した。最近、姉ヶ崎中学校の近くにできた介護施設の職員で、36 歳である。土足の跡が 2 階にも 3 階にもあり、忘れた眼鏡を放置したままで取りにいかなかったことも不自然である。マスクも眼鏡、それに靴跡も事件直前のものである。いかにも怪しい話なので、アリバイ他を調べた結果、事件当日は半休で、事件の時間帯のアリバイが無い。その上、タイムカードは 17 時 45 分まで職場にいたことになっている。上司に頼んでやってもらったことが判った。FX投資で失敗し、また競馬で負けて 5 百万円くらいの借金を抱えていることも判り、動機もある。借金の穴埋めに空き巣狙いを計ったのだろう。マスクや眼鏡から検出されたDNAが一致したので逮捕したが、黙秘を続けたままだ。

おそらくだが、荷物運びを手伝ったのは本当だろう。普段は迂回道路を車で通勤しているが、車をつかえないときには徒歩で自宅から神社前を経由し、被害者の家の前を通って、介護施設まで通勤していたのであろう。そして、たまたま荷物運びを手伝ったことがあったのだろう。そのとき被害者が一人暮らしで、常日頃から施錠しないまま出かけていることを知ってしまった。資産もありそうだと思って空き巣に入ったが、被害者が思いがけず帰宅したので鉢合わせしてしまった。もみ合ううちに自分も出血し、それが付着したマスクと眼鏡が落ち、顔を見られてしまったので殺したのだろう。気が動転してしまって、遺留品を残してしまった。用心のために刃物を持参したが、まさか殺人を犯すとは思ってもいなかったのだろうが、執拗に刃物を突き立てているので、顔を見られたための殺意が推測される。犯人と被害者が顔見知りだったのは間違いなからう。

顔の識別ができないにしても防犯カメラに自分の姿が映っているし、遺留品もあるので、いずれ逮捕されるかもしれないと思ったのだろう。妻と幼い子供 3 人を何としても守らなければならないと思い、アリバイ工作や証拠隠滅を企てたが、かえって疑念を持たれることになり、自ら辻褄合わせの説明したことが藪蛇になってしまった。証拠品を残してしまったのでそうせざるを得なかったのだろうが。警察への説明を書いたメモ書きも

関係場所で見つかったそうだ。逮捕後は自分だけでなく家族を守るために黙秘を続けているのだろうが、いずれ自白せざるを得ないだろう。

それにしても容疑者は投資や競馬で、とんでもない人生を送ることになり、悔やんでも悔やみきれないに違いない。

被害者の無念は計り知れないだろう。ご家族の突然の悲劇に対する悲しみを思うとやり切れない。

当然犯人は自分の犯した罪を償わなければならないが、自分の罪ではないのに子供たちに訪れた突然の不幸を思うと何ともやり切れない。殺人者の子供というレッテルを一生背負わなければならない。犯罪者の家族に対する世間の目は冷たく、仕打ちは刑務所にいる犯罪者より酷いこともあり、残酷なのだ。私もその冷たい世間の一人であり、例外ではなかろう。一瞬にして仲間外れにされ、友達、幼稚園、学校他の生活基盤をすべて失ってしまうのだ。血縁者でないにしても奥さんもほぼ同様の仕打ちを受けるだろう。それに家族が離散してしまう可能性も有る。それを思うと、とてもやり切れない。東野圭吾の著書「手紙」(\*6)を思い出す。映画化もされた。

\*6. 手紙(映画)のあらすじ

弟と2人暮らしの武島剛志は、弟の大学進学のための金欲しさに空き巣に入り思いがけず強盗殺人まで犯してしまう。高校生の武島直貴は、突然独りぼっちになり途方に暮れる。とにかく謝罪しようと直貴は被害者の家を訪れるが、遺族の姿を見かけただけで逃げ出してしまふ。高校の卒業式の2日前の直貴の元に、獄中の兄から初めての手紙が届く。それから月に一度、手紙が届くようになる。

獄中の兄の平穏な日々とは裏腹に、進学、就職、音楽、恋愛、結婚と、直貴がもう少しで幸せをつかもうとするたびに、直貴の前には「強盗殺人犯の弟」というレッテルが立ちはだかる。

それでも、直貴は自分を理解してくれる由実子と結婚して一時期、幸せが訪れる。しかし、娘の実紀が仲間はずれにされ、正々堂々と生きて行く意味を考えてしまふ。そして、獄中の兄に宛てて手紙を出すのだった。(ウイキペディア)

結婚する前、直貴は殺人者の血縁という事を隠して、同級生であり友人とお笑いコンビを結成し成功するが、やがて有名になると素性調べをされて兄・剛志が殺人犯とのタレコミが出て来る。仕方なくお笑いを引退し兄・剛志に決別の宣言をする。引退の理由を知らないコンビの友人とは喧嘩別れになってしまう。

直貴は結婚後、被害者家族との接触を経て、やがて自分が唯一の頼りである兄を許す気になり、兄の入所している刑務所に友人と一緒に慰問に行く。友人も引退した本当の理由を知り、協力してくれたのだ。お笑いの中で、兄・剛志は犯罪者の身内が自分より酷いことを知り、それにも関わらず、直貴が愚かな自分を許す気持ちになつてくれたことを理解し、泣きじゃくるシーンを思い出す。自分も涙を流した。

そして由美子と美紀が刑務所近くの公園で、直貴を待つ間に遊んでいるところに母子連れが近寄ってきて一緒に遊んでくれる。この瞬間だけかもしれないが、日常の生活が戻ったのだ。このシーンを見て、また涙がとめどなく流れたのを思い出す。

時間がかかり経ったので、少し間違っているかもしれない。小説では弟は歌手として刑務所を慰問し歌うのだが、やはりお笑いコンビにした方が直貴の気持ちが兄によく伝わってくると思った。

それとは別に、奥さん役の女優が清純そのものの雰囲気です不幸に立ち向かう健気な姿が思い出され、その時に受けた彼女の印象とその後の彼女の人生とのギャップが大き過ぎて、映画と実人生は別物とは分かっているけど、いまだに得心がいかない。

私は栗栖庸介とは異なり、事件解決に向けて、何の協力もできなかった。ただ事件に巻き込まれただけだ。

ある意味で犯罪者より酷い仕打ちを受ける犯罪者家族の理不尽を思うとやるせない気持ちになってしまう。犯罪に対して自分を律し、犯罪そのものを憎むことは当然だが、犯罪者家族の悲劇を少しでも減らすような社会環境作りが必要だろう。

いずれ、「チバニアン」も訪れるつもりだ。

参考資料

- ・石黒修一氏 ; 「姉崎のあゆみ—日本史の中の姉崎」
- ・ウィキペディア
- ・市原教育委員会 「市原のあゆみ」
- ・鈴木亨著「日本合戦史 100 話」 中央公論社
- ・千葉日報

以上